



# ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2018年9月 第69号

## 巻頭言：監事就任にあたって

ーリスクマネジメントの「3つのム」ー

監事 高市幸男(リスク管理研究所)

2018年4月1日、中島真澄先生の退任による補充で、監事に就任しました高市幸男と申します。現在63歳、年を食った若輩者となりますが、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

東京商工リサーチで社員(調査員)を15年、管理職を11年、取締役を12年、顧問を3年勤め、実に与信管理一筋41年となります。中部地区本部長時代に愛知学院大学大学院でリスクマネジメントの講師をし、本を1冊出版したところを太田三郎先生に見い出され(?)、当学会に誘われたのが、入会の経緯です。よって初めて入ったのが当学会であり、以後分科会の参加や大会での研究発表、論文の掲載など、大変お世話になっております。会社とは違ったアカデミックな世界を体験させていただき、感謝しております。

リスクマネジメントは、個人から家庭、企業、自治体など社会の構成員全てを対象とし、かつ自然災害から経営の失敗や、商品・製品の品質、経済・金融政策などなど、この世にある全てのものにリスクが存在するため、その研究は極めて広範に及びます。よって分野によって研究の深度、対応の進捗がバラバラであり、正しい研究と教育の必要性が実感されます。

例えば、台風が来るという天気予報だけで翌日の電車を全て止めてしまう。これは過剰反応であり、手段が目的を大幅に上回った「ムダ」というものです。津波が来たからといって海岸線に高い壁を作る。どこに来るか? いつ来るか? どの位の高さか? 誰にもわからず、更に日本の海岸線全てに壁を作れる筈もなく、これは手段が目的より小さい「ムリ」というものです。効果がわからないのに多額のお金を使うという点では「ムダ」とも言えます。東日本大震災の時、たった

### 目次

巻頭言：監事就任にあたってーリスクマネジメントの「3つのム」ー	会場(千葉商科大学)までの交通のご案内	4
危機管理システム研究学会 第18回年次大会のご案内	【連載随筆2】リスク評価と行動経済学の問い	5
第18回年次大会プログラム	分科会活動報告	6
	学会員の学位・論文・新刊書のご紹介	12
	事務局からのお知らせ	13

一つの部品の供給がストップしたために、製造ラインが止まったという会社がありました。不良債権の発生を防止するための得意先管理はよく行っているが、仕入先・外注先や物流の管理は特にしていなかったという「ムラ」も確認されます。

これら「3つのム」の存在は、社会資本の大きな浪費となり、大問題と言えます。この問題を解決するには、「正しいリスクの認識と評価、対応の選択」が有効と考えられます。そのためには、真摯なリスクマネジメントの研究と正しい教育が必要であります。従って学会が果たすべき役割・使命には極めて大きいものがあると言えます。

当学会は、私が入会した時より規模が縮小し、活動も鈍くなってきた感が歪めません。その原因の検証は別にして、当学会は幸いにして、リスクマネジメントという社会および全ての組織が関係・必要とするテーマを扱い、しかも、実学としての研究も多く、発展する要素を十分に兼ね備えております。私も微力ながら、当学会発展のために、努力したいと思っております。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

以上

## 危機管理システム研究学会 第18回年次大会のご案内

第18回年次大会 大会長 千葉啓司

拝啓 会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度の標記大会は、「リスクマネジメントにおけるアカウントビリティーの役割：社会的責任の観点から」をテーマに掲げて下記の通り開催いたします。会員の皆様には、公私ともにお忙しいことと存じますが、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

敬具

### 記

1. 日 時： 平成 30 年 10 月 6 日(土)
2. 会 場： 千葉商科大学  
〒272-8512  
千葉県市川市国府台(こうのだい)一丁目 3 番 1 号
3. 参加費： 大会参加費 5,000 円
4. 申込方法： **別途郵送するご案内状に同封の郵便振替取扱票に所定の事項をご記入の上、参加費の振込を大会長「千葉啓司」あてにお願いします。**  
**大会参加は参加費の振込をもって確認させていただきます。**
5. 申込締切： 平成 30 日年 9 月 21 日(金)

以上

\* 報告資料は、9 月 25 日以降に、学会 HP にアップする予定です。

# 第18回年次大会プログラム

日時： 2018年10月6日(土)

会場： 千葉商科大学

テーマ： リスクマネジメントにおけるアカウンタビリティの役割：  
社会的責任の観点から

午前の部 10:00～ (受付:9:30～11:30)

A会場(1号館1104教室) 司会:千葉啓司(千葉商科大学教授)

第一報告	10:00～ 10:40	長井 健人 (MS&AD インターリスク総研株式会社) 「ISO31000 や COSO-ERM の改定からみる今後の企業 RM」
第二報告	10:40～ 11:20	土屋 清人 (千葉商科大学会計大学院客員講師・税理士) 「建築業界の CSR に貢献する建築物のマーケットイン価格設定法 ～循環型社会形成を可能にする価格設定理論～」
第三報告	11:20～ 12:00	井上 善博 (神戸学院大学教授) 「素直な心と指導者の条件 - 国際経営の課題について」

B会場(1号館1103教室) 司会:太田 三郎(千葉商科大学教授)

第一報告	10:40～ 11:20	高市 幸男 (東京商工リサーチ) 「リスクマネジメントとしての情報開示の機能・役割 — 中小企業に於ける「受信管理」の具体的施策として—」
第二報告	11:20～ 12:00	指田 朝久 (東京海上日動リスクコンサルティング株式会社) 「首都直下地震火災の被害想定を再認識する — 関東大震災の大火は台風による例外ではない—」

午後の部(1号館1104教室) 受付 :12:30～

分科会報告	13:00～ 13:30	各分科会より活動状況報告
パネル ディスカッション	13:40～	テーマ: リスクマネジメントにおけるアカウンタビリティの役割： 社会的責任の観点から 座長: 藤江 俊彦 (千葉商科大学名誉教授)
第一報告	13:40～ 14:20	佐竹 恒彦 (環太平洋大学准教授) 「経営者のリーダーシップ開発とアカウンタビリティ： — 中小企業再生の観点から—」
第二報告	14:20～ 15:00	大羽 宏一 (大分大学名誉教授、尚絅大学名誉教授) 「自動運転のリスクと法的対応の今後」
第三報告	15:00～ 15:40	辻 純一郎 (J&T 治験塾塾長、EPS ホールディングス(株)社外監査役) 「3.11 震災と浦安の市街地液状化対策の事例から」
ディス カッション	16:10～ 17:10	座長: 藤江 俊彦 パネリスト: 佐竹 恒彦、大羽 宏一、辻 純一郎
懇親会	17:30～ 19:30	(本館3階ファカルティ)

## 会場(千葉商科大学)までの交通のご案内

- JR 総武線：市川駅下車  
徒歩約 20 分、バス利用  
の場合は、駅前京成バ  
ス 1 番のりばから松戸駅  
行または松戸営業所行  
に乗車約 10 分 和洋女  
子大前下車 徒歩 3 分

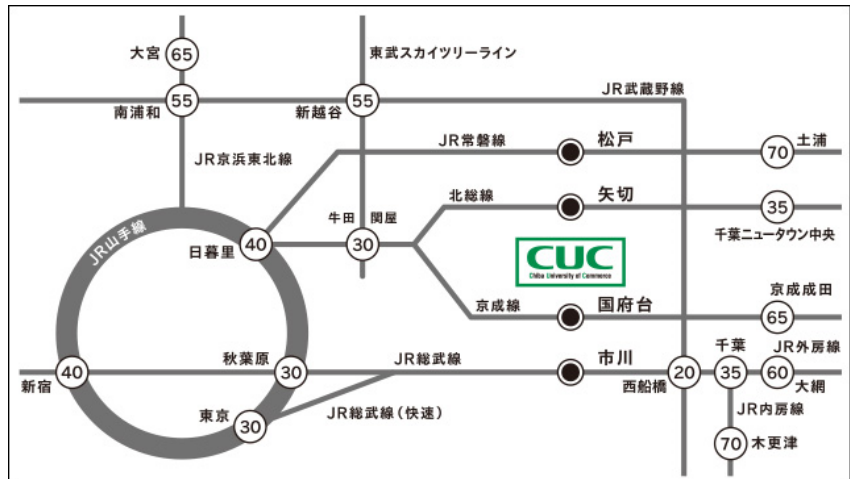
- 京成線：国府台駅下車  
徒歩約 10 分

- 北総線：矢切駅下車  
徒歩約 20 分

バス利用の場合は、駅

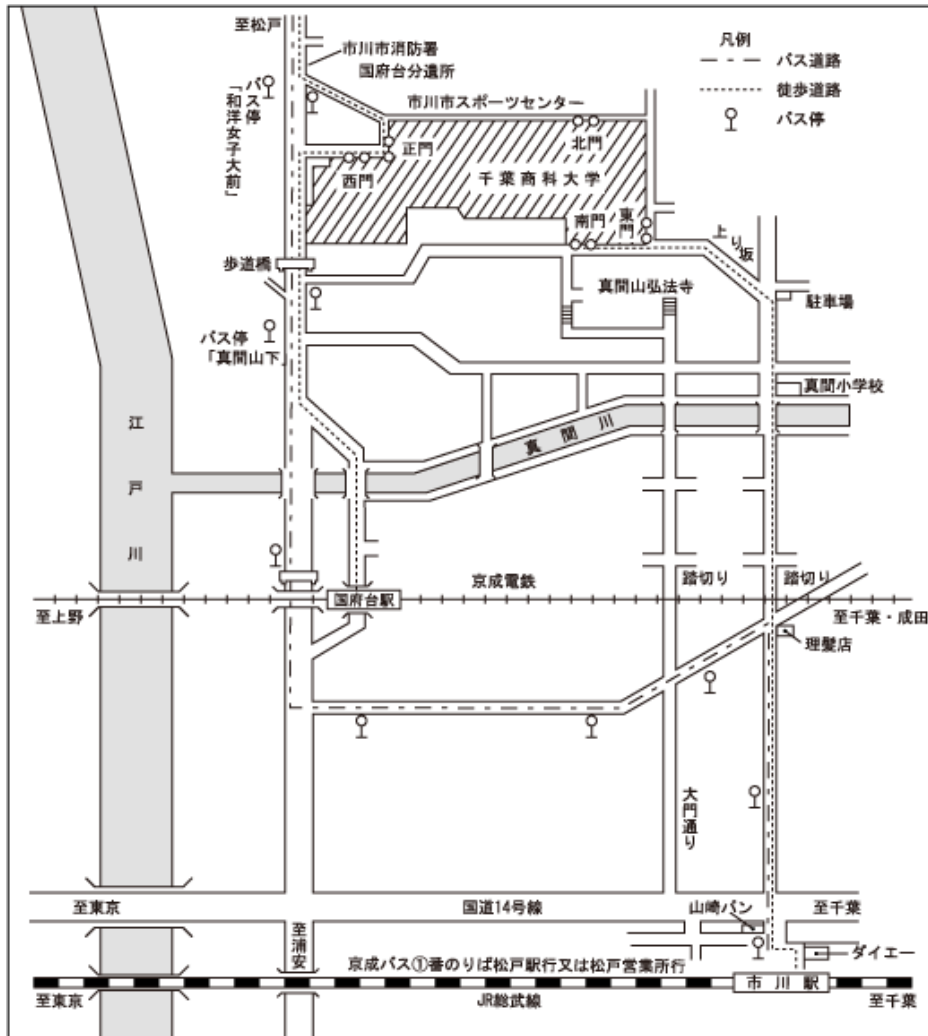
前京成バスのりばから市川駅行に乗車約 10 分 和洋女子大前下車 徒歩 3 分

- JR 常磐線：松戸駅京成バス 1 番のりばから市川方面行に乗車約 20 分 和洋女子大前  
下車 徒歩 3 分



数字は本学までのおおよその所要時間(分) ※乗り換えなどの時間は含みません。  
●最寄り駅

## JR 市川駅、京成国府台駅 から大学までの交通図



## 【連載随筆 2】 リスク評価と行動経済学の問い

笹子 善平

行動経済学という学問があります。人間の行動が必ずしも「合理的」でないことを前提に、その行動原理を解明し、実務課題にも応用しようとするものです。

例えば、ゲームに参加すれば

A: 参加賞で 800 円もらえる。

B: 続けて 2 択のクイズに参加すれば、正解 50% で 1600 円もらえ、外れ 50% で 0 円、の状況だとします。

日本人にアンケートを取ると参加賞だけでやめる人が多数を占め、もともと貰ったものだからと賭けにでる人は有意に少ないとの話があります。この人達に、次のゲームに参加させようとする、 $u(x)=\sqrt{x}$  の効用曲線に従い、賞金を 3200 円ぐらいにして期待値(統計的平均値)で明らかに有利に設定する必要があるという説です。

従来の経済学ではいかなる場合も経済合理的に行動する「経済人」を想定し、種々の経済モデルは構築されています。このゲームへの応用では、明らかに有利でなくとも同じ期待値なら選択結果の累積実績も同じになると考えます。しかしながら、人は経済合理性では説明できない判断軸で行動するというのです。

たしかに、心理的に貰ったものは懐に入れて欲はかかないという保守的な行動パターンがあるかもしれません。どうせ貰ったものだから勝負するとの判断を良しとするかは国により文化により違いがあるとも思われます。後続のクイズに参加し 1600 円になった喜びは、せっかく貰った 800 円がゼロになる悲しみに比べれば小さいと考えるのが日本人かも知れません。

しかし、この行動経済学の説明には疑問があり、すべて肯定することはできないと私は思います。まず、今手元の 800 円を大事にし、将来の 1600 円のチャンスに見向きもしない、これが 1700 円や 1800 円程度では選択を変えない人は、「不合理」な行動判断をしていると必ずしも言えないと思えるからです。

この行動経済学の問いは、事象が完全に外部から隔離されパズルの解を求めるような問題へのアプローチを、日常生活のなかでのクイズの参加者にあてはめています。これは一面的です。世の中にはいろんなリスクがあります。2 択のクイズの正解確率 50% がすべてではないと思います。

例えば、クイズの途中で主催者の気が変わるかも知れません(法的には一方的なプレゼント・贈与は引き渡し前なら取り消し自由です。)、2 択の問題が正解者多数続出で主催者が支払えなくなるかも知れません。いわば正解率が市場リスクだとすれば、ゲームのルールが変わるオペレーショナルリスクもあれば、主催者が倒産する信用リスクもあるわけです。800 円を持ってその場を立ち去る日本人こそが経済合理的な判断をしている可能性があると思います。

正確を期するなら行動経済学のアンケートは、ルールは変わらないし主催者は資力あり倒産しないなどどくどくどその他の要因の無リスクの説明をする必要がありますが、これは突き詰めると、 $800 \text{ 円} = 1600 \text{ 円} / 2$  を正しいと思いますかという問いになり、ただの算数の問題になってしまいます。

行動経済学の問いの意味は、問題提起として、流されていく人間社会や不安定な人間行動

に、自然科学のような法則性を見出そうとすることに限界があるということではないかと思えます。伝統的な経済学モデルのインプリケーションの課題の指摘に留まり、行動経済学自体が自然科学的なモデル化すれば同じ限界に突き当たるだけです。

翻ってリスク管理の世界で言えば、人間が行うリスクアセスメント・評価やそれに基づくリスク対応の判断は、とても危ういものだと自覚しなければならないと思います。フレームとして置いている前提を持って、一切前提を置くことの出来ない現実に向き合うことだとわかっている必要があります。数値化できる要因がフレームに入りやすく、オペレーショナルリスクなど数値化が難しい要因は入っていないことを自覚すべきです。

わかりやすい例をあげましょう。「カボチャの馬車」事件というスルガ銀行の不祥事が新聞を賑わしました。事件自体は、ローンの実行時に文書偽造などの不正が行われていたものですが、内容は社会問題になっている家賃保証付アパートローンのシェアハウス(複数人を対象に大きな貸家を賃貸する。)版です。アパートなどの建売会社等がその後の家賃収入を一括して保証し、家賃収入でローンの支払い後も収入が保証される収支予定を示して販売しますが、その保証は一定期間でその後は収入が激変し、大家の持ち出しや自己破産になるというものです。

これも保証期間内の収支という限定されたフレーム内でのみ「合理的」な話をネタに、ローンによるアパート建設プロジェクト全体を正当化し販売する「手口」です。

うまい話しは疑ってみるという伝統的常識を、「不合理な人間行動」とするのなら、うまい話の前提・フレームを明確化し、限界を意識した上で、入ってないリスクを包括するアセスメントの実施が、リスク管理に知見のある人間の「合理的行動」としたいと思います。

---

## 分科会活動報告

### 【RMS(リスクマネジメントシステム)研究分科会】

主査:指田朝久(東京海上日動リスクコンサルティング)

危機管理システム研究学会の2018年4月以降の活動について報告します。

#### ①BS11200 研究 WG

BS11200は、「Crisis management. Guidance and good practice」と題する、危機管理についての英国規格です。今年度は、この規格について研究することになりました。活動としては、3月26日に進め方についての討議お行い、4月19日に第1回、6月4日に第2回のワーキングを開催しました。第3回は9月19日を予定しています。

それ以降は下表のとおりです。始まったばかりですので、興味のある方は是非ご参加ください。

WG	目次(仮訳)	開催時期
第1回	はじめに、1. スコープ、2. 用語と定義	2018年4月20日
第2回	3. 危機管理	6月4日
第3回	4. 危機管理能力の構築(4.1~4.5.3.2)	9月19日
第4回	4. 危機管理能力の構築(4.5.3.3~4.8)	10~11月頃

WG	目次(仮訳)	開催時期
第5回	5. 危機対応指導者	12~2019年1月頃
第6回	6. 危機における戦略的な意思決定	2~3月頃
第7回	7. 危機コミュニケーション	4~5月頃
第8回	8. 訓練・演習、危機からの学び	6~7月頃
第9回	まとめ	8~9月頃

## ②事例研究 WG

2018年度の開催は、未定です。日程が決まり次第ご案内する予定です。

以上

## 【企業活性化研究分科会】

主査：木村充宏

### (1)企業活性化研究分科会・2018年度活動報告

企業活性化研究分科会の2018年度の分科会は下記の通り実施しました。4月以降、毎月実施しております。2017年度は、従来の企業活性化研究の範囲を超えて幅広く企業財務に関連した研究を行うこととなり事業再生、粉飾事例だけでなく多くの企業財務に関連した研究が報告されましたが、2018年度は「継続企業の前提に関する注記の記載解消企業の研究」に限定した報告となります。

#### <第105回 2018年4月14日(土)時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

- 参加者：井端、木村、鈴木、高市、但野、宮川(6名)
- テーマ：最近の粉飾事例の分析(ナガオカ、ソルガム・ジャパン HD)と継続企業の前提に関する注記の検討(報告者:井端和男、配付資料:15枚)

本報告は、ナガオカ、ソルガム・ジャパンHDを題材に、最近の粉飾事例を分析したものである。四半期毎の売上高や売上債権、回転期間を図式化し、その異常を判別しやすく、可視化する方法を提案した。2社の事例をもとにして、図式化してその異常な分布パターンを判別できることを検証した。

#### <第106回 2018年5月12日(土)時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

- 参加者：井端、木村、鈴木、高市、但野、宮川、山本洋(7名)
- テーマ1：大黒屋 HD の分析(継続企業の前提に関する注記の記載を解消した企業の研究)(報告者:但野稜馬、配付資料:8枚)

本報告は、継続企業の前提に関する注記の記載を解消した大黒屋ホールディングスについて分析したものである。大黒屋HDが2003年3月期において継続企業の前提に関する注記が記載されて以来、2013年度において継続企業の記載が解消した。その解消に至った要因を分析したものである。

- テーマ2：インスペックの分析(継続企業の前提に関する注記の記載を解消した企業の研究)(報告者:宮川宏、配付資料:18枚)



本報告は、2009年4月期にGC注記が付され、2014年4月期にGC注記が解消されたインスペックを取り上げて、GC注記が付された理由と解消した理由を分析して、GC注記解消がどのような要因で行われるか、分析したものである。インスペックにおけるGC注記が付された時点とGC注記が外された時点の比較貸借対照表を作成し、比較検討した。加えて、注記前後および解消前後の比較検討を行った。その結果、GC解消の視点として、比較貸借対照表を用いて二時点間の比較することで、注記解消の財務的な視点を明らかにしている。

#### <第107回 2018年6月23日(土)時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

1. 参加者: 井端、木村、鈴木、高市、但野、夏目、宮川(7名)
2. テーマ1: 伊豆シャボテンリゾートの分析(継続企業の前提に関する注記の記載を解消した企業の研究)(報告者:夏目拓哉、配付資料:9枚)

本報告は、継続企業の前提に関する注記の記載を解消し伊豆シャボテンリゾートについて分析したものである。伊豆シャボテンリゾートがGC注記解消前後の収益性分析をおこない、収益性分析の観点からGC注記解消に至った要因と企業の再生した要因を分析した。

3. テーマ2: セーラー万年筆の分析(継続企業の前提に関する注記の記載を解消した企業の研究)(報告者:木村充宏、配付資料:18枚)

本報告は、継続企業の前提に関する注記の記載を解消したセーラー万年筆(株)について分析したものである。セーラー万年筆が継続企業の前提に関する注記を解消にしたが、本当に企業再生を果たしたのかを検証した。検証の結果、セーラー万年筆は自前のできることをやり尽くした感があり、十分に再生を果たしていないことを指摘した。

4. テーマ3: グラフによる売上債権異常発見法(報告者:井端和男、配付資料:17枚)

4月分科会における報告に続き、グラフによる売上債権異常発見法の報告を行った。倒産会社や不適正会計処理を判明した企業の四半期データから、売上債権の異常変動や分布例を示し、売上債権変動パターンによる売上債権の異常を発見する手法を提案した。

#### (2)企業活性化研究分科会 2018年度活動計画

企業活性化研究分科会では、これまで継続企業の前提に関する注記の該当企業、倒産、粉飾、会計不正した企業の分析を行ってきた。一方で、再生企業の分析として回復した企業の研究を行ってきている。これまで多くの研究蓄積ができていますが、いずれも答えが出ていないと考えられる。現在、少しずつであるが、倒産企業が増えている。また会計不正により企業業績の悪化、倒産まで至ることも増えてきていると思われる。最近の先行研究では、継続企業の前提に該当する前後での株価変化、また継続企業の前提を解消した前後での株価変化などの実証分析が多く行われている。しかし、個々の事例を研究している分析が見受けられないし、まだ十分な検証がなされていない。そこで、次年度の研究は、継続企業の前提に関する注記の記載解消を果たした企業を分析対象に、どのような要因を行うことで注記解消が認められたのか、どのような対策を講じることで不確実性が認められなくなったのか、いわゆる継続企業の前提に関する注記に対してどのような企業の再生行動をとったのかを検証することで、危機的狀態を脱した企業の再生を明らかにすることが可能になると考えられる。その検証を踏まえうえて、再生の定義をまとめていく。

- ①第一段階では GC 注記が付された前後の年度を分析することで企業がどのような要因で



悪化・低迷をしていったのかを明らかにする。その状況が明らかになれば、どのような視点から再生を果たす必要があるのか把握できると考えられる。

- ②第二段階では、GC 注記の解消した前後の年度をみることで、第一段階で把握した要因がどのように改善したのか、またどのような再生行動を行い、どのように業績への影響を及ぼすのかを検証することができると考えられる。そのほかにも、GC 注記が付された年度と GC 注記が外れた年度の二時点間の比較によっても復帰した要因を把握することも可能である。

以上

---

## 【リスクマネジメント大学教育分科会】

主査 宮林正恭

### 1. 2017 年度活動報告

本分科会は、今後の大学におけるリスクマネジメント教育について考えるとともに、各大学のリスクマネジメント教育の相互交流にも資することを主な狙いとして設置されたものである。また、大学のリスクマネジメント教育の充実のための実践的活動も今後の検討課題としてきた。

2017 年度については、主査および主査代理の双方が本務で多忙を極め、学会活動を積極的に行う余裕がなかった結果、結果として 1 年間の休会となってしまった。主査としては大変会員の皆様に申し訳ないと考えており、お許しをいただきたいと思っている。

### 2. 2018 年度活動計画(案)

この分科会が 2017 年 1 月における千葉科学大学の危機管理学部の状況について、講師(木村教授)にお話を頂くとともに議論をした後、昨年度休会せざるを得なかった背景には、各大学の現状についてお話をいただける講師確保の予定が非常に立ちにくくなったことがある。講師にはもっぱらボランティアで来て頂くこととなるので、これまで東京近傍に限られざるを得なかった。遠方(例えば、関西)の場合、お見えになれるチャンスがある場合に限られることになり、その日程調整は非常に困難な場合が多かった。そのようなことから、これまでの講師に来ていただいて、そのお話をもとに議論をするというスタイルに限界を感じざるを得ない状況にあった。

そこで、講師にきていただくかなくても開催できるようなシステムの工夫を主査の方で考えるべく努力してきたが、良い案が見当たらず、今に至ったという事情がある。

引き続き検討を進めるとともに、本分科会の今後の進め方についてのオプションを提示し、今後の進め方について議論をして、本分科会のあり方を決定することとしたい。

主査 宮林正恭

E メール [m.miyabayashi@ifeng.or.jp](mailto:m.miyabayashi@ifeng.or.jp)

---

## 【社会性とリスクマネジメント研究分科会】

主査 井上 善博(神戸学院大学)

### [第 14 回研究会]

日 時: 2018 年 6 月 9 日(土)10 時~12 時 30 分

場 所: 新大阪丸ビル, 309 会議室

参加者: 藤江俊彦・高梨薫・鈴木英夫・石橋千佳子・井上善博・薮孝雄

研究報告：「フォレットの統合論とリーダーシップの役割—オムロン京都太陽(株)の事例から」  
(滋賀大学大学院 石橋 千佳子氏)

報告要旨：

さまざまなステークホルダー間のコンフリクトを「統合」、すなわち対話を通じた「状況の法則」の発見によって解決してゆこうとする M.P.フォレット説は現代的にも興味深い。だが、その現実化にはそもそも建設的対話を可能にする契機が必要であろう。本稿は、その契機をステークホルダー間に共有される理念を創出し、また機能させるリーダーシップに求め、障害者雇用事業が孕むコンフリクトを巧みに乗り越えてきたオムロン京都太陽(株)に即して、企業創設にあたって発揮されたリーダーシップ及び生産現場で機能しているリーダーシップの様相を、聞き取り調査によって検証した。その結果、まず、フォレットのリーダーシップ像の基調は、「power over」ではなく「power with」であり、それがまたフォレットの「統合」論に適うものでもあることを確認した。オムロン京都太陽(株)に即して、具体的な生産現場でのリーダーシップの様相を検証してみると、そこにも中村氏の理念とベンチャー精神をも含めた立石氏の経営理念が貫かれていた。のみならず、そのもとの、個人も組織も成長しうる道を指し示す「状況の法則」を発見するために、その場で状況をもっとも熟知している人がリーダーシップを発揮するという、フォレットが想定していたような柔軟なリーダーシップもまた機能していた。

こうして、障害者雇用事業という営利企業にとってシビアなコンフリクトを孕む分野においても、「統合」による解決が成り立つこと、それを促す契機としてリーダーシップが機能していることを確認することができた。現場ではフォレットが思い描いた柔軟なリーダーシップもたしかに機能しているが、最高経営者に固有のリーダーシップが機能してこそそのことであることも確認された。こうした意味で、フォレットの主唱した「統合」をより現実化しようとするれば、その一つの契機として円環的な重層構造を持ったリーダーシップを鍛えることという課題が浮かび上がってきたと言える。

[第 15 回研究会]

日時： 2018 年 8 月 1 日(水)10 時～12 時 30 分

場所： 新大阪丸ビル, 309 会議室

参加者： 藤江俊彦・高梨薫・鈴木英夫・石橋千佳子・井上善博

研究報告：「否認のリスクマネジメント」

(GRC 研究所 ai リスクコンサルティング代表 鈴木英夫氏)

報告要旨：

人間の脳には原始的な自我防衛機能があり、多大なストレスをもたらす事実と直面すると、決まって事実を否定する。これが否認の原理である。本研究では、日本の社会は、①遠くで大きなリスクを否認する傾向がある、②小さくとも、近くのリスクを否認しないという仮説の下に、実際のリスク要因と否認の関係が整理された。統計資料分析に基づくと、重篤な感染症や犯罪に遭遇するかもしれないという、遠いリスクに対しては、多くの日本人が否認する傾向があることが分かった。食中毒は、身近なリスクであり、多くの日本人が否認せず、危機意識が高かった。同様、地震災害のリスクについても、多くの日本人が、危機意識を持っているという統計結果が明らかになった。西日本豪雨災害で、日本人がどの程度、危機否認し、あるいは危機認識をもっていたかは、これからの研究課題とする。

## [今後の研究計画]

本研究分科会では、広く社会におけるリスクの認識について研究している。今後の研究課題の1の柱は、組織の不祥事研究である。組織論的観点から組織の不祥事のリスクとその改善策について研究を進めていく予定である。組織とは企業のみならず、スポーツチームの不祥事などについても検討したい。例えば、アメリカンフットボールのゲームでの違反行為が今、問題になっている。このような違反行為で、それが組織的に黙認されていたことが問題である。そのような非常識がなぜ常識として蔓延していたのか、部員、監督、そして大学などそれぞれの心的惰性について検証したい。

研究課題の第2の柱は、日本の社会保障のリスクである。少子高齢化がますます進む中で日本の社会制度がいかにか維持されていくのか、社会保障のリスクはどこにあるのかについて検討していく。

研究課題の第3の柱は、経営管理におけるリスクである。企業の中では、多様な人材が衝突しあい、発展的にそれがいい方向に向けば、企業にとっての力となる。この経営管理におけるコンフリクトについて検討していく。

以上

---

## 【科学技術リスク研究分科会】

主査 多田浩之(未来工学研究所)

### 1. 本年度の活動状況

本年度の初めから、主査自身が本業で身動きがとれず、本年度はまだ分科会の開催には至っていない。お許しをいただきたく思っている。

### 2. 今後の活動方針

本年度は、「AIとリスク」に焦点を置いて分科会を実施していきたい。分科会はこれまでのように、外部の専門家の講演を軸としたスタイルだけではなく、分科会メンバーで「AIとリスク」に関するテーマを検討し、公開の資料を使用しながら、各メンバーが担当部分について発表する形式で進めていく方針としたい。

参考資料は、AIと社会との関係に関する研究として、国際的に認知されている以下等の資料を使用する予定である。

- ・ AI Now 2017 Report (ニューヨーク大学)
- ・ Stanford AI100: One hundred year study of Artificial Intelligence (スタンフォード大学)
- ・ Benefits & Risks of Artificial Intelligence (Future of Life Institute (FLI))

### 3. 開催場所

本年度は、未来工学研究所(東西線・大江戸線 門前仲町から徒歩5分)にて分科会を開催する予定です。

以上

## 学会員の学位・論文・新刊書のご紹介

著書名：図説 損害保険ビジネス 第3版

著者：株式会社 トムソンネット編 鈴木 治、岩本 堯、  
小島 修矢(当学会理事)、川上 洋 著

書籍紹介：

累計1万部超のロングセラー『図説 損害保険ビジネス』の第3版です。第3版では、損保業界に起こりつつある地殻変動期突入に備えて、新種保険を中心とした新成長戦略と、それを支えるインフラ整備・人材育成、代理店の大型化・プロフェッショナル化等について提言しています。

第1章 損害保険とは何か

第2章 損保国内市場の現状と今後の課題

第3章 損保ビジネスの基本

第4章 損害保険の起源と日本における発達—今に生きる先人の知恵—

第5章 自由化突入から20年間の軌跡(1996～2016年)

第6章 損害保険の業務とシステム

第7章 損害保険商品

第8章 損害保険の募集と保険代理店

第9章 デジタル革命の進展と今後の損保ビジネス

第10章 損保経営のガバナンスとERM

出版社	株式会社きんざい	版型	A5版	発売日	2018/5/14
ISBN	978-4322132342	ページ数	244ページ	価格	2,000円＋税



著書名：実践 事業継続マネジメント 第4版

災害に強い企業を作るために

著者：東京海上日動リスクコンサルティング株式会社  
指田朝久(共著)

書籍紹介：

2006年の初版から版を重ねて第4版となりました。

本書は、“事業の継続は経営の最重要課題”をテーマに、事業中断が起こる様々なリスクや起こりうる災害に対する企業のBCP、BCMの策定プロセスを具体的に解説しています。

第4版では、第3版から内容を大幅に改めたほか、企業・病院等計9組織の取組み事例を新たに加え、第3版以前の版をお持ちの方にも参考となる内容です



出版社	同文館出版	版型	21.2 x 15 x 1.8 cm	発売日	2018/2/15
ISBN	978-4-495-37644-4	ページ数	256ページ	価格	2,400円＋税

## <事務局からのお知らせ>

### 1. 分科会連絡先

分科会	主査	連絡先メールアドレス
リスクマネジメントシステム研究	指田 朝久	t.sashida<@>tokiorisk.co.jp
リスク事例サロン	有賀 平	taira-aruga<@> aioinissaydowa.co.jp
メディカル・リスクマネジメント	吉川 賢一	yoshikawaken1<@>aol.com
企業活性化研究	木村 充宏	kimura<@>nikkei-r.co.jp
価値ベース・リスクマネジメント研究	千葉 啓司	k-chiba<@>cuc.ac.jp
科学技術リスク研究	多田 浩之	htada001<@>gmail.com
社会性とリスクマネジメント研究	井上 善博	inoue<@>eb.kobegakuin.ac.jp
リスクマネジメント大学教育	宮林 正恭	miyabayashi.masayasu<@> gmail.com
震災とリスク管理研究	吉田 靖	tdr48office<@>gmail.com

※分科会連絡先は、分科会への参加等を希望した場合の連絡先です。主に、分科会主査の連絡先ではありますが、事務局をもつ分科会は担当の方の連絡先となります。

※なお、迷惑メール防止のため@を全角文字にしています。お手数をお掛けしますが、各分科会に連絡の際は、“<@>”を半角の@に変換してからお送りください。

### 2. 新入会員紹介（敬称略・順不同）

入会なし

### 3. 住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更が生じた場合には、変更前と変更後を併記の上、必ず文書・メールにて事務局宛ご連絡ください。

また大会関連、年報募集等のさまざまな連絡を、学会メーリングリストを利用して行っております。会社等で利用しているメールサーバーのセキュリティ上、メーリングリスト類を拒否することがあります。以下の学会メーリングリスト(ドメイン)の受信許可をしていただくと幸いです。

<学会メーリングリスト(送信専用)>

[arimass-all-01@arimass-jp.org](mailto:arimass-all-01@arimass-jp.org)

[arimass-all-02@arimass-jp.org](mailto:arimass-all-02@arimass-jp.org)

注：上記は、学会事務局から会員向けの情報発信専用のメールアドレスです。学会員からのメール送信には使えません。ご注意ください。

学会事務局へのメール送信は、[arimass-office00@arimass-jp.org](mailto:arimass-office00@arimass-jp.org)、または[office@arimass.jp](mailto:office@arimass.jp)をお願いします。

## 【 編 集 後 記 】

2018 年度の年次大会まで、約 1 か月となりました。

今年の大会のテーマは、『リスクマネジメントにおけるアカウンタビリティの役割：社会的責任の観点から』です。

昨今、ESG についての関心が高い投資家や企業が急増しているようです。

その背景には、企業者や投資家の投資家が、環境（Environment）、社会（Social）、ガバナンス（Governance）においてしっかりと責任を果たしている企業ほど、その収益力や永続性が高いという傾向があるからだといわれています。

逆に考えると、E・S・G に対して責任を果たさないこと、あるいは果たせないことは、企業経営において大きなリスクとなり得るということでしょう。

年次大会では、そのあたりの議論が期待できそうですね。10 月 6 日に、皆様にお会いできることを楽しみにしています。

広報・編集委員長 長井健人

E-mail: [office4@arimass.jp](mailto:office4@arimass.jp)

発行： 危機管理システム研究学会

〒214-8580  
住 所： 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1  
専修大学 3 号館 3501 研究室

E-mail: [arimass-office00@arimass-jp.org](mailto:arimass-office00@arimass-jp.org)  
または、  
[office@arimass.jp](mailto:office@arimass.jp)

発行日： 2018 年 9 月 8 日

URL: <http://arimass.jp/>